資料◆寺子屋の教育

いろは覚え【篠崎家277】

寺子屋の「手習い」（書くこと）の学習は、ひらがな・漢字・カタカナがありました。これは、その手習いの教科書です。

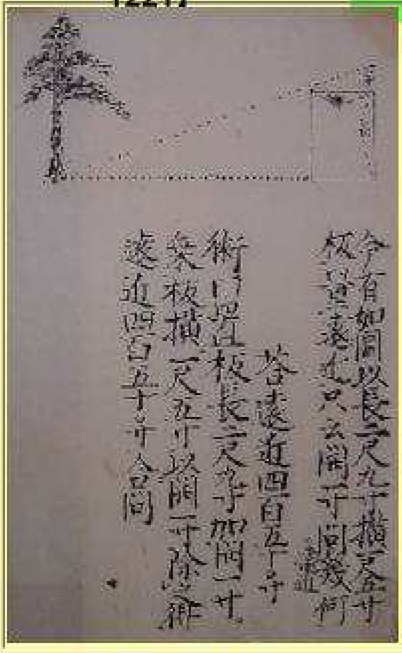
寺子屋教示【会田家6908】

読みし文へ（ｐｄｆ）

「教示」とは知識や方法を教え示すことです。通常、寺子屋の師匠は一人で、それが生涯の師になることも多かったようです。これを読むと、この寺子屋における教育方針をつかむことができます。生活習慣、父母への礼、主従の関係、読書教育など、広い範囲のことが書かれています。

算盤書【平川家1221】

読み下し文へ（ｐｄｆ）



商工業や交通の発達は、珠算の普及や和算の広がりを促しました。和算については、1622年、京都の吉田光由により最初の数学書ともいうべき「塵劫記（じんこうき）」が編さん・刊行され、数学の普及に重要な役割を果たしました。算盤書とはそろばんの教科書という意味で、実践的な計算問題と解答が記されています。

寺子屋師匠の身分（「埼玉県教育史」より作成）

埼玉県教育委員会編集の『埼玉県教育史』（第１巻）によると、県域の寺子屋数は江戸時代の中期以降飛躍的に伸びています。これは、江戸幕府の政治が文書行政であり、通達が中央から地方へ文書で伝えられたことによります。この結果、日本の識字率は当時世界最高水準でした。県域の寺子屋数は731校（江戸時代末期）で、村数は江戸時代を通じて約2230で、村数に対する寺子屋の数は３割程度ということになります。